

越前少掾死後の

豊竹派(明治維新迄)

明和二年七月二十五日初日、道頓堀東の芝居、即ち豊竹座では、豊竹應律その他の合作で『内助手柄淵』(松田和吉作『河内國乳母火』の改作物)が豊竹鐘太夫、駒太夫、麓太夫、三味線鶴澤重次郎、同寛治、同名八、人形若竹伊三郎、豊松藤五郎、などいふ顔觸れで出てゐる。この狂言が、名作だつたわけでもなく、市中の人氣を湧き立たせたわけではないから殊さら此處へ引例するほどの淨瑠璃ではないのだが、わざと引き出して來た理由は、實はこの狂言を最後として、名譽ある道頓堀豊竹座が退轉の止むなきに至つたといふ淨瑠璃史上の記録に止むべき事柄であるからなのである。

明和元年九月十三日、豊竹越前少掾死すると共に、驕奢生活に憂き身を寢してゐた越前の惣領息子甚六は、天晴れ豊竹座を繼いで行かねばならぬ身でありながら、とうとう經營難といふ反對の結果を招いて、その興行の八月三十日を名残りとして、哀れや豊竹座は人手に渡つてしまつた。元祿十五年五月、義太夫の門下から出で、西の竹本座に相對峙して、東に豊竹座の櫓を掲げ、豊竹一派を高唱して、操り芝居の覇を稱へた六十四年の光輝ある歴史はこゝに果敢なき没落を告げたのであつた。もちろん此没落は惣領甚六の、其人で無かつたのが直接原因ではあるが、その後二年四ヶ月を経た明和四年十二月には、西の竹本座も同じ退轉の憂き目に遭遇してゐる。だから、操り芝居の一轉機に際會してゐたと見ることが出来るのである。かういふ次第で、歌舞伎やその他の興行物に蠶食せられてゐる状態は、この豊竹座の跡が、その十一月にもう、妻川菊八の歌舞伎芝居、顔見世興行といふことになつてゐるのを見ればすぐ了解が出来ると思ふ。

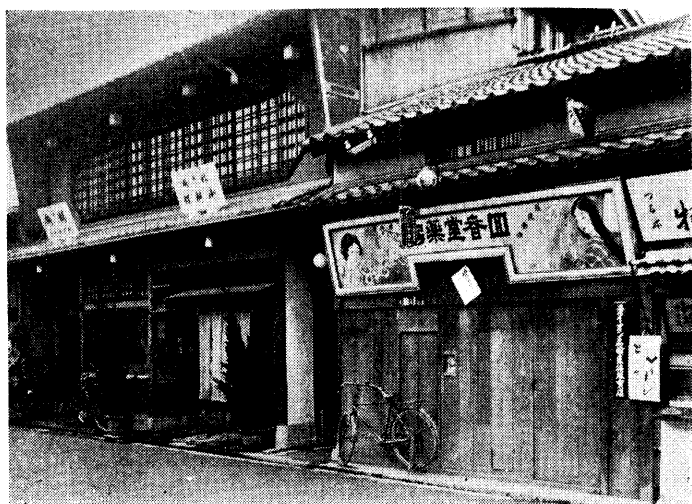
この頃ではその後の豊竹座一派の人々が、どういふ行動を執つて來たか(竹本座の人々のことを多く記録したから)暫く豊竹派の方へ筆を轉じて、明治維新に至るまでの動靜を窺つて見ることにしたいと思ふ。

さて巨城豊竹座は見事に崩壊したが、城は崩れても、操り芝居その物はさう簡単に滅亡はしない、國亂れて忠臣現はる、といふこともある、豊竹派を永く後世に傳へる爲めに、この没落の悲報を聞きつけて、直ちに馳けつけた、豊竹派一方の旗頭二代目豊竹此太夫は

急遽その善後策を謀つたのである。此太夫は實はかうしたお家の大事が起つてゐるとは知らず、かねて人形遣ひの若竹藤工郎と共に、江戸の旅興行に出てゐて、殆んど寢耳に水の状態で、素破こそとばかり歸阪して來たのだつた。そこで取り敢へず、一派の人々を集め北堀江市之側西側へ新たに芝居を設けて、座本豊竹此母の名によつて、明和三年八月に、豊竹派復興の第一次興行の蓋を開けた。即ちその陣容は『扇子合名月座舗』と題し、

新舞臺式三番叟、安倍宗任松浦笠二、梶原源太紅梅籠三、双蝶々八、江戸土産富貴英。

と云ふ取合はせ、豊竹此太夫を座長格に生駒太夫（後の二代駒太夫）麓太夫、時太夫、八重太夫、三味線鶴澤十次郎、名八、豊澤仲助人形若竹三郎、藤工郎、伊三郎その他。



江戸市之側西側芝居(再興豊竹座)の跡

さらにその翌四年正月三日初日で、こんどは座本豊竹此吉の名で、並木宗輔、豊竹應律等の合作『星兜弓勢鑑』を上演した。こゝでちよつと言ひたいことは、從來此興行を以て豊竹派再興の第一回として知られてゐるが、私は前記三年八月の興行に新舞臺を壽ぐ『式三番』が出てゐることから見て、いづれが第一回興行か疑ひを持つてゐる、或は初めのは試みにやつて見て、第二回目に初めて組織的に名乗つて出たものかも知れない。然かし市之側西側芝居の新築されたのは三年八月の興行であることは間違ひない。

新たなる地盤と本據を得た豊竹派は着々その經營の歩みを固め、同明和四年十二月にはとう／＼大きな産物を世の中へ現はした。それは即ちお染久松の芝居である。十五日初日菅專助作、切『染模様妹背門松』が燦然として淨瑠璃史上に光りを放つてゐるのがそれである。櫓下此太夫の質店。時太夫の油店。若竹伊三郎の久作、三十郎のお染、友五郎の久松、といふ役割で、素晴らしい人氣を揚げたこの興行が果たしてどれほどの成績を揚げたか、それは數字によつて知るよしもないが、この興行の後、その芝居小屋の裏手へ、人形や衣裳その他の道具類を

納める倉庫を建築することが出来たのだから、可なりな興行成績であつたに違ひない。さうして、その倉が、一時に有名になつて、世間の人々から『お染倉』といふ名譽ある名を頂戴して、淨瑠璃數寄者には、なつかしい思出の跡として偲ばれたのだから素晴らしい。この倉は明治年間まで残つてあつて、當時瓦屋橋の西詰にあつた油屋の倉と對照され、堀江と島の内に一對の大版らしい淨瑠璃名所をのこしてゐたのであるが、今はもう二つともあとかたも無くなつてゐる。序でだからちよつと傍道へそれるが、そも／＼芝居の大入り大當りを祝ふ一つの表徴として、こんな風に倉を建てるといふ前例が、それまでも幾つもあるらしいが、享保十一年四月八日から、翌十二年閏正月末日まで、二年越し十一ヶ月間の大入を續けた豊竹座の、西澤一鳳、並木宗輔、安田蛙文等の『北條時頼記』にも、その大當り記念に、芝居小屋の隣地へ土藏を建て、祝つた。それを『北條藏』と稱されたといふことが記録に見えてゐる、その藏は後に火災で焼失したといふことであるが、芝居道で、由來大入り大當りの時を稱して藏入れと稱へ、小屋の前へ藏入れ幟を出すことなど、その例によるものだといふことである。

話はまた本筋へ還つて、この堀江市之側の芝居が次第に豊竹派の隆盛を見るに至つたと同時に、作者としての菅專助を得て、どれほど後世淨瑠璃界と歌舞伎界に貢獻するところがあつたかといふことは次に擧げるところの藝題を見ればすぐわかる、現今でも歌舞伎芝居や文樂座の淨瑠璃でおなじみの狂言が、これから續々と現はれてくる。

明和五年十二月上演、菅專助作『助六揚卷紙子仕立兩面鑑』これは市之側よりも寧ろ歌舞伎の方へ移つてから有名になつたが、現在でも仁左衛門や延若によつて多く演ぜられる。また安永二年二月には、菅專助、若竹笛躬合作『攝州合邦辻』が始めて上演され、合邦内の場は此太夫、玉手御前を豊松重五郎、合邦を同彌三郎、が勤めてゐる。同年四月、同じ合作で『伊達娘戀縛鹿子』お七の半鐘場が呼び物になる。同五年十月には菅專助作『桂川連理柵』同六年三月『伊賀越乗掛合羽』近松東南作、尙また天明元年六月には『鎌倉三代記』が出る。これは作者未詳。寛政元年八月には菅專助、中村魚眼合作で『有職鎌倉山』同六年十月近松やなぎ松助合作『日本賢女鑑』享和元年十月近松やなぎその他合作『日吉丸稚櫻』が悉く書卸で上演されてゐる。こんな調子で、勿論享保や寛延頃の全盛には及ぶべくもないが、ともかく連続的に後世に残る狂言を出して、淨瑠璃史に又新たる光彩を點じたことは偉とするに足り、後人は以上の名作に對して感謝の意を表して可なりである。

菅專助歿後だん／＼不振、どうやらこうやら弘化の初年まで持ち續けて來たのである。

ところが此市之側芝居の豊竹派の外に、明和七年九月のこと、曩に没落した道頓堀の豊竹座の再興が企てられたことがあつて、座本豊竹此吉の名で、櫓下に豊竹島大夫、駒大夫、此大夫、三人の名で『源平鴨鳥越』が出てゐるが、翌八年八月には、此大夫は矢張り分離して元の市之側の芝居へ歸つて引續いて興行をしてゐる。

そこで残つた豊竹座の連中は、座本豊竹和哥三、櫓下島大夫、駒大夫で、安永四年まで興行を續けたが、約五年間で永續きはせず、座員は四方へ離散してしまつたが、凡そは市之側の芝居へ歸つたものが多かつたのである。此間に、後世に残る狂言を三つのかしてゐる。即ち明和八年八月、竹本三郎兵衛他合作『迎駕籠死期茜染』（島大夫の聚樂町）安永元年十二月同作『艶容女舞衣』同二年十一月作者未詳『櫻鏝恨鮫鞘』

市之側芝居の位置は時代により、又再三の火災で其位置が移動し、その稱呼も區々になつて居り、前記西側の芝居の外に東側芝居が出来、後には堀江芝居（文久三年九月）の名の下に市之側大露路内に一本となつて現はれ、明治時代の堀江座（近松座派の前身興行場）に移つて行たが、主として淨瑠璃の道場（歌舞伎も興行はしたが）として終始したことは淨瑠璃史上、道頓堀の竹本、豊竹兩座に次いで特記す可きものだと思ふ。尙ほ委しいことは郷土研究資料『南北堀江誌』演藝之部を参照されたい。

淨瑠璃三業仲間申合規則設立の儀御願

淨瑠璃三業仲間申合規則相設立別冊之通商法會議所ニ於テ決議候ニ付實施ノ儀御願届被成下度此段奉願上候也

明治十三年三月十日

右 同盟仲間 取締人

豊 澤 廣 助
木 谷 傳 次 郎
平 井 卯 兵 衛
鶴 澤 重 助

大阪府知事 渡 邊 昇 殿

(一)